

民俗資料からみた村落の土地利用と環境認識

関 戸 明 子

- I. はじめに
- II. 民俗資料とは何か
- III. 文書記録と聞き取りによる土地利用の復原
- IV. 小字地名からみた環境認識のあり方
 - (1) 分析の方法
 - (2) 地名の配置関係
 - (3) 地名の語彙の分布
- V. 伝説・伝承からみた山に対する認識
- VI. おわりに

I. はじめに

本稿は、環境を歴史的に把握するための手法について、民俗資料を中心として論ずることを課題としている。そこで、本稿では、まず「民俗資料とは何か」という問題を検討する。そして、それをふまえた上で、一つの事例とする村落を取り上げ、土地利用を復原し、その結果から民俗資料の性質と収集についての問題、それのもつ有効性と限界性について考えたい。

さらに、本稿では、具体的な四つの山間の村落を取り上げ、民俗資料として地名の分析を行う。ここでは、明治前期における生業を中心とした村落生活の様相を明らかにし、土地利用と地名の配置関係・語彙の分布との関係を検討する。そして、村落をとりまく土地はどのように利用されてきたのか、ムラ人はどのように環境を認識していたのか、考察を試みる。また、最後には、伝説・伝承からみた山に対する認識について、民俗誌などを利用しつつ、若干の検討を行う。

明治前期の土地利用を考察する場合、地籍図

や旧版地形図から貴重な情報を得ることができ。しかし、そこに記載された情報は、土地を利用する側の視点ではなく、地図作成者によって認識されたものである。したがって、当時の土地利用の実態を把握するには、具体的な記述が残された資料を活用する必要がある。また、分析の対象とする小字地名もそういった影響を受けたものであるが、そのなかには土地の人々の認識が多分に含まれている。地名の分析から当時の人々の環境認識のあり方を問うことによって、さまざまな価値が込められた土地利用の実態が浮かんでくるのではないだろうか。本稿で取り上げるような村落レベルのローカルな環境を把握するには、このような視点が必要であると考える。

II. 民俗資料とは何か

民俗資料について論じたものは、近年ほとんど見られない。それは、地理資料論が地理学で取り扱われないのと同様に、民俗学においても自明のこととして改めて問いなおすことがないためといえよう。ただし、ここでは、民俗資料によって環境を把握することを課題としているため、民俗資料の概念を検討する必要がある。そこで、いくつかの先行研究に依拠しながら、民俗資料とは何かという問題から考察していきたい。

民俗資料とは、端的に言えば、民俗学の研究対象となる資料といえる。例えば、和歌森太郎は、『日本民俗事典』において、「民俗学研究上の資料。それはいっさいの民間伝承資料であり、常民の生活体験のうちにくりかえして累積して

きた生活事実と文化的表現、またそれらに伴う観念や器具・造型物のすべて」と定義している¹⁾。

かつては、民俗学の形成過程、すなわち歴史学に対する民俗学独自の学問領域の存在を主張するため、非文献資料である直接収集された民俗資料を重視する立場が取られてきた。例えば、『民俗学辞典』の「採集法」の項には、「民俗学は常民の日常生活の伝承、すなわち文献記録のきわめて乏しい分野を研究領域とする学問であり、資料は主として民間伝承から得られる。その資料を主として実地について集めることが採集である」とある²⁾。さらに「民俗資料」の項には、柳田國男の考案による次のような分類を示している。それは、第一に「目によるもの」、第二に「耳によるもの」、第三に「心によるもの」という分類で³⁾、それぞれ以下のような項目からなる⁴⁾。

1. 有形文化：住居、衣服、食制、漁業、
林業・狩、農業、交通・交
易、贈与・社交、労働、村
組織、家族、婚姻、誕生、
葬制、年中行事、神祭、舞
踏競技、童戯童詞
2. 言語芸術：命名、言葉、諺・謎、民謡、
語り物、昔話、伝説
3. 心意現象：妖怪・幽霊、兆・占・禁・
呪、民間療法

この分類は、研究者が調査に赴く便宜を考えたもので、旅行の途中にでも観察できるようなものから、多少とも土地の言葉に通じなければならぬ口承、さらに同郷人の感覚によらなければ理解できないような心意というように、現地での直接的な資料収集を基本にして考えられている。

こうした民俗学的な採集資料に対し、古島敏雄は次のような批判を行った⁵⁾。それは、採集され、記録された資料が、その地における同様の事象の他の表現といかなる量的・質的關係があるのか注意されていないこと、社会的な現象についての言い伝えは、伝承者の人生の最盛時に

経験したことによって整理され、合理化されたものであり、以前の事実を伝えるものとは限らないこと、などの点である。前者の指摘に対しては、のちに民俗資料の採集にあたっての条件分析の必要性が説かれるようになるが、後者の伝承の変質の問題については、いまだ十分な議論がなされていない⁶⁾。

また、有賀喜左衛門は、民俗学の研究資料を、1. 記録伝承、2. 造形伝承、3. 行為・言語・感得による伝承の三つに区分し、とくに第三の伝承によるものを民俗資料と命名してその意味を論じている。そこでは、雑多な生活事象を漠然と採集してきたことを批判し、計画的、組織的な採集を求め、記録資料に対して史料批判が必要のように、民俗資料に対しても厳密な調査方法の整備と再調査が必要であることを論じている。有賀は、記録資料が生活事象を断片的にしか示さないという欠陥を民俗資料によって補うことを強調する。またそれとともに、過去の生活の復原のためには、過去の事実として伝承されている民俗資料だけでなく、過去の記録資料を用いることも求めている⁷⁾。

こうした歴史的復原について、和歌森太郎は、個々の民俗資料を歴史過程の中で変貌変質した「なれの果て」とみるのではなく、歴史過程のなかから積極的に生み出されたものとみる態度が必要であると述べる。そして、現実と原初のみを基準にするのではなく、歴史の各段階において民俗資料を扱うことを求めている。さらにここでは、直接採集した資料を主にしつつも、過去の文書記録類のなかにかがえるものを民俗史料と呼び、その活用を説く。また、和歌森は、民俗資料とは、各村落ごとに反復伝承されて慣習化されている生活事実や、口碑あるいはものの考え方としている。その伝承の主体は個人や家ではなく、村落の大多数の家々に支配的な傾向であるものを前提とし、民俗資料は、基体としての地域社会の構造と不可分からみつき、その機能として、村人の全生活を制約する、あるいは規範づけているものになると述べる⁸⁾。

また、従来からの民俗資料の内容を検討した

うえで、西垣晴次は、民俗資料の性格として次の3点を示した⁹⁾。

第一に「民俗資料は、……個人的な性格からうみだされたものでなく、……社会の習慣であり、習慣を支え伝えてきた集団の存在と不可分なものである。集団を基盤に伝承されてきた有形・無形の習俗が、民俗資料である」。第二に「民俗資料は集団により支えられてきたものだから、その集団のもつ地域性と歴史性とをともに反映するものである」。第三に「民俗資料はそれが伝承されてきたもの」であり、「それぞれの地域独自の伝承の論理ともいべきものをもつようになる」。

以上のように、和歌森や西垣に見られる特徴は、民俗資料の性格において、集団によって伝えられてきたものであり、歴史性と地域性¹⁰⁾をもつことを強調する立場にある。このように民俗資料は、村落という集団の歴史性・地域性を反映するものであり、歴史地理学研究にとっても格好の分析材料となりうると考えることができる。また民俗資料は、有形のもの（例えば、土地利用・家族関係・村落組織）・無形のもの（左の事象を表す民俗語彙、またはそれにもなう心意表現）の両者を含むという捉え方が共通理解となっていると考えてよからう。

こうして、民俗資料が民間伝承や民俗語彙、それにもなう心意表現だけではなく、家族・住居・生業などを考察の対象として扱い、なおかつそれらを記録した文書や造型物も考察するというのであれば、地理学や歴史学、社会学などとの差異を認めることができなくなる。

したがって、民俗学のみが扱う独自の資料というものは見いだすことができず、そこでは人々の行為・言語・心意のうちに伝えられてきた基層的な文化の解明のために、どんな資料が価値を持つかということが重要な基準となる¹¹⁾。この点では千葉徳爾の次のような見解に従いたい。千葉は「習俗、伝承をもち伝えている人びとの隠れた心持を求め、その来由、意義を明らかにする」という民俗学の目的にあうような、住民自身の考え方に直接かかわる資料こそ重要なも

のであるとする。そして文書記録や地形・気候・植物などは一般的には資料としての価値が低い、それらが住民の考え方を表す場合には単純に価値が低いとは断定できないと述べている¹²⁾。

そこで次に、文書記録と聞き取りによる土地利用の復原をとおして、民俗資料の性質と収集の問題について論ずる。

Ⅲ. 文書記録と聞き取りによる 土地利用の復原

土地利用に関する民俗資料として、千葉徳爾は、1. 村落の各部分の配置、2. 居住地と物資、3. 生産用地と技術、4. 交通連絡と労力、5. 霊地と地目という五つの分類項目を示しているが¹³⁾、ここでは、生産用地を中心に考察する。そして一つの村落を取り上げ、直接収集した聞き取りによる資料と土地台帳という文書に記録された資料を用いて土地利用を復原し、その成果からそれぞれの有効性と限界性について述べたい。

具体的な事例として、石鎚山の南西に位置する愛媛県おもご面河村おおなるの大成という村落を取り上げる¹⁴⁾。この大成は、仁淀川の支流の一つである坂瀬川の起伏の大きな谷をその領域とし、昭和25(1950)年当時には戸数28軒、人口234人を数えた、焼畑を主たる生業とした村落である。

図1は、土地台帳に記載されている地目の変化を追いながら、昭和20(1945)年の時点のデータを地籍図に落として、土地利用を復原したものである。これによれば、村落の中央を流れる坂瀬川の谷を境にして、北東向きの斜面には集落が立地し、その周囲に常畑(畑)が位置すること、集落の対岸の南東向きの斜面には焼畑(伐替畑)が大きく広がっていること、採草地(草地)が点在すること、大成の境界となっている尾根筋から北側の上流部は山林によって占められていることが読み取れる。

一方、図2は、小字地名を一つずつ示しながら、昭和20年以降の焼畑における輪作作物を複数の人から聞き取った結果を表したものである。これによれば、常畑ではトウモロコシ・イモ・



図1 土地台帳による大成の昭和20(1945)年当時の土地利用の復原

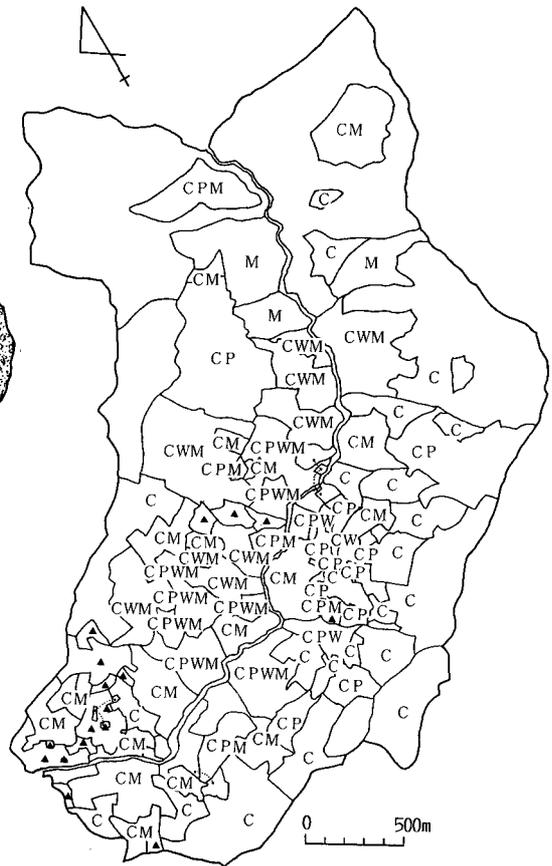


図2 聞き取りによる大成の昭和20(1945)年以降の輪作作物の復原

C: トウモロコシ P: イモ W: ムギ
M: ミツマタ ▲: 資料欠

ムギが栽培されていたこと、焼畑では主食であったトウモロコシを中心とする食料生産ののちに、換金作物であるミツマタを栽培していたこと、それぞれの土地条件によって作物の組み合わせが選択されていたこと、尾根筋の土地では作物は栽培されていなかったことなどがわかる。このように聞き取りによる復原は、その当時の焼畑経営の状況を具体的に示し、それぞれの土地条件に対応しながら、環境を巧みに利用していたことを教えてくれる。

しかしながら、土地利用のように、単年度もしくは5年程度で大きく変動する可能性のある

ものは、聞き取りによる復原には限界がある。例えば、現在70歳代の人に10歳代のことを尋ねるのであれば、それは昭和10年代の時点までしか遡ることができないし、また上の世代から伝えられていることを尋ねるにしても、不正確なものとならざるをえない。

それに対し、土地台帳に記載された地目を利用することは、明治中期から現在に至るまでの各時点における変化を追うことが可能であり、地番ごとの詳細な位置を確認することもできる。しかし、地目は実際の土地利用にあわせて届けられているとは限らず、現状と一致していない

場合もある。事実、大成でも伐替畑から山林への地目の変化が変換年不詳として処理されている例も見られ、図1で伐替畑と示された土地でも、昭和20年より前に造林地へ転換していたところもある。また、地目からでは畑や山林がどのように利用されていたのか、具体的に読み取ることはできない。

したがって、土地利用の復原にあたっては、以上のような記録資料と聞き取り資料の有効性と限界性をふまえたうえで、より効果的な復原を求めていくことが重要となる。

IV. 小字地名からみた環境認識のあり方

(1) 分析の方法

ここでは、四つの山間の村落を取り上げ、千葉徳爾の提示した地域変換法を参考にして、土地利用と地名の配置関係・語彙の分布との関係を検討し、環境認識のあり方を探ってみたい。

千葉は民俗資料を、次の2種類に分けて扱っている。それは、第一種の民俗資料は民間伝承の要素を構成するもの、第二種の民俗資料はその時代的・地域的枠組みを形成するものの二つである。そして、比較のための地域的社会的スケールを同一にし、第二種資料の条件の違いが大きな場合、第一種資料の本質的な部分と地域性と時代性にかかわり変動する部分とを解明するのに有効であると説く¹⁵⁾。

本稿では、第一種資料として、土地利用に関する民俗資料のうち、地名を取り上げる。また、第二種資料としては、農業生産の違いを取り上げ、稲作主体の村落と畑作主体の村落を選択し、それに明治初期までに焼畑が廃絶したか、昭和30年代まで焼畑が残存したかという指標を組み合わせ、表1に示した太郎路・杉谷・平雄・大成の四つの村落を事例に分析することにした¹⁶⁾。

表1 事例村落の類型

	焼畑が廃絶	焼畑が存続
稲作	奈良県曾爾村太郎路	福井県今庄町杉谷
畑作	奈良県西吉野村平雄	愛媛県面河村大成

ここで民俗資料として取り上げる地名は、住民の土地に対する認識が現れたものであり、土地をめぐる伝承と具体的な場所をつなぐ鍵となるものである。四つの村落を比較することによって、地名の本質的な部分と可変的な部分を検討し、環境認識のあり方を探ってみたい。

この場合、地名は住民の生活が表現される日常的に使用されていたものが望ましく、いわゆる通称地名がそれにあたる。通称地名の採取には、優れた伝承者と認められている特定の個人からの集約的な聞き取りが行われることになるだろう。こうして伝承者から採集された地名が、その社会集団にとっての普遍的知識として考察の対象とされる。しかし、こうした知識を安易に社会集団にとって普遍的なものとして受け取るのではなく、その知識の量と質を問うこと、いいかえれば、知識の村落内における社会的な位置づけとその変化を検討することが必要なのではないか。実際、地名の保有量には世代差・個人差があり、ましてさまざまな地域の比較をするととなると、質量ともそろった資料を集めることは困難である。

そのため、ここでは明治20(1887)年頃に作成された土地台帳と地籍図によって抽出した小字地名によって比較を試みたい。こうした小字地名は、地租改正以降の土地管理のため、行政機関によって整理されたものである。しかし、当時使用されていた地名がまったく無視されて台帳に記載されたとは考えられない。したがって、小字地名は、地名改変が大規模に進められた地域を除けば、この時期に社会集団によって共有されていたものを文字記録にした民俗資料と判断してよいだろう。それと同時に、小字地名は、公的なものとされたために、固定化され、長く使用されてきた歴史的な史料でもある。また、同時期の資料を各地で収集することが容易であるという利点もあげられる。

(2) 地名の配置関係

まず、各類型の事例ごとに、地形図にみられる明治後期の土地利用の特色と小字地名の分布

表2 事例村落の明治前期の戸数・人口と地目構成・地名数

	戸数	人口	地目構成 (%)					小字地名の数
			宅地	田	畑	山林	原野	
太郎路	28	160	0.5	6.6	5.4	19.8	67.7	104
杉谷	32	170	1.0	11.4	1.6	84.7	1.3	63
平雄	87	350	2.5	1.8	37.4	18.2	40.1	438
大成	(25)	(180)	0.6	0.0	71.9	21.9	5.6	169

注1) 戸数と人口は、太郎路・平雄は明治9年、杉谷は明治11年、大成は明治8年と昭和25年のデータによる明治11年の推計値

2) 地目構成は、太郎路・平雄は明治14年、杉谷・大成は明治21年

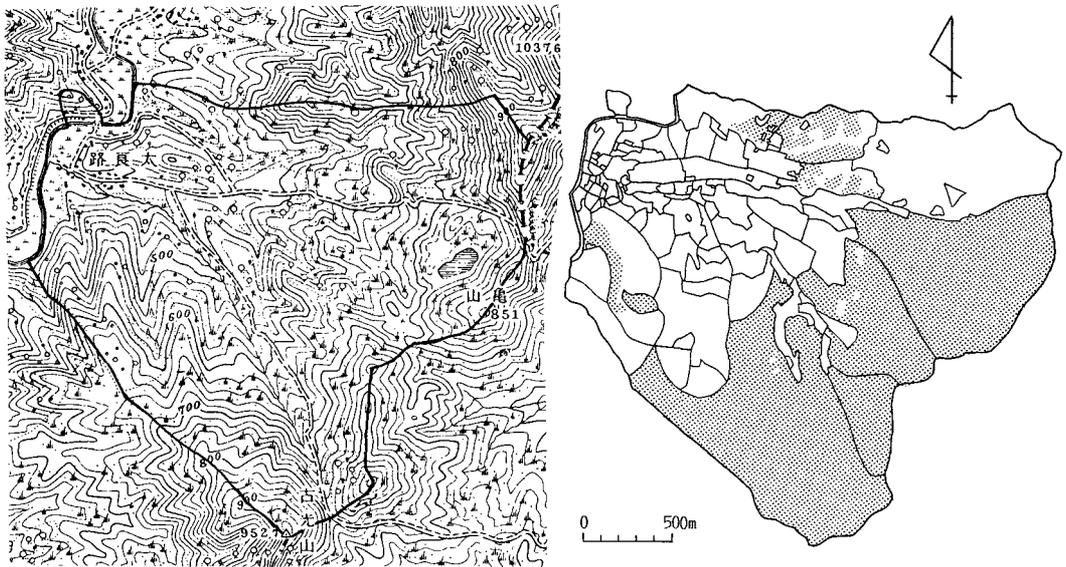


図3 奈良県曾爾村太郎路の地形図と小字界
(明治25 <1892> 年測図5万分の1「名張町」)
アミの部分 は明治22 (1889) 年当時の部落有林野

について検討していく。そしてさらに、表2を利用しながら、明治前期の農業生産と土地利用について、具体的に記述し、小字地名との関係を探ってみたい。

図3は、稲作が主体で明治初期までに焼畑が廃絶した、太郎路の地形図と小字界を示したものである。太郎路は奈良県の北東部に位置し、三重県と境界を接する。太郎路では、その西端を流れる木津川水系の青蓮寺川に沿って水田が広がり、その支谷に家屋と水田・畑が展開している。地形図の表現では、亀山から古光山にかけての山腹のほとんどは荒地となっており、広

葉樹林や針葉樹林は一部に見られるにすぎない。小字地名の密度は谷沿いの集落と耕地の部分で高く、荒地の部分は密度が低くなっている。

太郎路では、水田177反が生産の中心を担い、畑作物としてはソバ・アワ・キビ・ダイズ・ナタネ、その他の産物として茶と煙草があげられる。こうした農業を主体に、薪炭生産を組み合わせさせて生業としていた。太郎路では原野(草山)が全面積の68%を占めるが、これらのほとんどは農業用の採草地として利用されていた。また、林野の大半は太郎路の部落有の入会地で、毎年春に火入れをすることで採草地が維持されてい



図4 福井県今庄町杉谷の地形図と小字界
 (明治42〈1909〉年測図5万分の1「冠山」)
 アミの部分は明治22(1889)年当時の部落有林野

た。しかし、このような管理のもとにあった林野は、郡役所において、秣に利用するのはわずかで、年々いたずらに灰塵になるに過ぎないと認識されていた。地形図にみられた荒地の表現は、こうした利用形態が景観的に捉えられたものといえる。太郎路ではこのような入会採草地が、大きな面積の小字となっている。

図4は、稲作が主体で昭和30年代まで焼畑が存続した、杉谷の地形図と小字界を示したものである。杉谷は福井県の南部、日野川の支流である宅良川の上流部に位置する。地形図をみると、谷に沿って集落と水田が伸びており、その周囲に広がる山はすべて広葉樹林となっている。小字の密度は、集落と水田の部分で高く、山の部分は小さな谷を単位にして尾根筋で区別されていることがわかる。

杉谷では、水田148反が生産の中心となり、畑作物としてはソバ・アワ・キビ・ヒエ・ダイズ・アズキ、その他の産物として葛粉があげられる。林野ではソバを初年度作物とする焼畑が行われたほか、次第に製炭や養蚕のための利用度が高くなっていった。杉谷の生業は、稲作を中心に焼畑・製炭・養蚕を副次的に加えて営まれていた。山林が全面積の85%と大半を占めるが、こ

こは明治初期まではすべて入会林野であった。しかし、部落有の林野は、明治22(1889)年までに解体が進み、各小字に分散するかたちで残存するのみとなった。私有化された林野では、下草を自由に刈ることができ、草肥とされた。太郎路同様、かつての入会林野の部分が大きな面積の小字となっている。

図5は、畑作が主体で明治初期までに焼畑が廃絶した、平雄の地形図と小字界を示したものである。平雄は奈良県の南西部、吉野川の支流である宗川の流域に位置する。平雄では、南向きの斜面に家屋が散在しており、その周囲を取り囲むようなかたちで畑が広がっており、柚野山周辺や北向き斜面はすべて針葉樹で被われている。平雄では、集落と常畑の部分での地名の密度が著しく高く、それ以外の山林での密度が低いことがわかる。

平雄では水田は14反しかなく、常畑284反が生産の中心を担い、畑作物としてムギ・イモ・トウモロコシ・アワ・ヒエ・ダイズ、その他の産物として杉檜丸太・煙草・棕櫚皮・当帰があげられる。このように、平雄では畑作に林産物の生産を加えて生業としていた。明治初期には原野の割合が40%と高いが、これは焼畑の跡地お

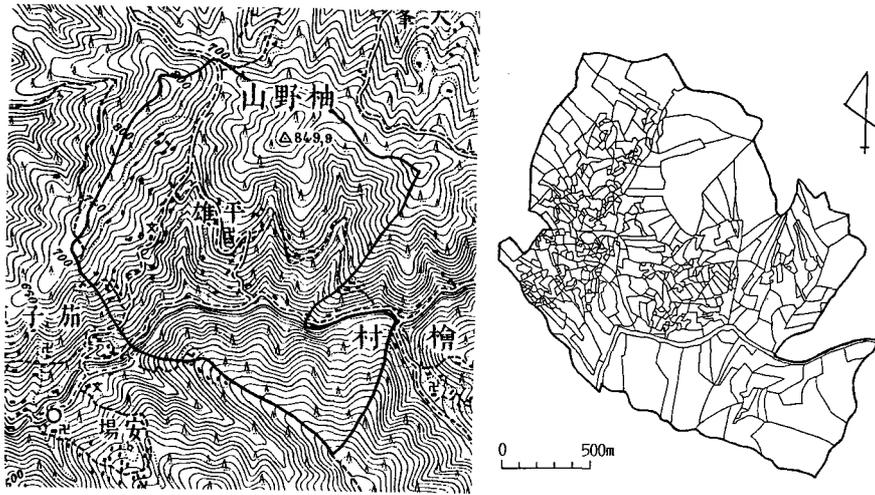


図5 奈良県西吉野村平雄の地形図と小字界
 (明治44〈1911〉年測図5万分の1「山上ヶ嶽」)



図6 愛媛県面河村大成の地形図と小字界
 (明治39〈1906〉年測図5万分の1「石鐘山」)
 アミの部分は明治22(1889)年当時の部落有林野

よび採草地で、明治20(1887)年頃より杉の植林地へ転換していった。平雄の入会林野は明治初期までにすべて解体した。これは、この周辺は吉野林業地帯の外縁部に位置するため、林野の経済的な価値が高く、村外への流出が進んだためである。また他の村落と比較して、平雄の人口はかなり大きい、それを支えるために傾斜地においても集約的な土地利用が行われていた。その結果として地名が細分化されたと考えられる。

図6は、畑作が主体で昭和30年代まで焼畑が残存した、大成の地形図と小字界を示したものである。大成は仁淀川水系の源流部の一つで、地形図では、上流部に混交樹林がみられるが、それ以外では畑・荒地・広葉樹林が一定の広がりを持ちながら分布している。小字界をみると、宅地とその周辺のわずかな常畑の部分では、平雄と同じように地名の密度が著しく高い。それ以外のところでは、広葉樹林となっている尾根筋や上流部ほど密度が低くなっていることがわかる。

大成では水田は一枚もなく、常畑も49反のみで、伐替畑(焼畑)856反において、トウモロコシ・ムギ・ソバ・イモ・ダイズ・アズキなどが生産されていた。伐替畑を含めた畑の割合は72%を占める。大成におけるミツマタの導入は明治30(1897)年頃で、それ以前は自給作物が主体となっていた。地形図にみられる畑と荒地は、それぞれ焼畑とその休閑地に対応している。また、小字面積の大きな尾根筋や上流の部分は部落有林野となっている。それに対し、焼畑経営の可能な林野では私有地化が進み、地名が細分化されていることがわかる。

以上のように、宅地や耕地のように土地の利用頻度が高くなっているところほど、地名の密度の高いことがわかる。これは、そのような土地ほど細やかに識別されていたことを示し、そこから環境認識のあり方を読み取ることができよう。また畑でも、焼畑のように循環的に利用される土地よりも常畑の方がより地名の密度が高くなっており、固定的な利用によって地名が

細分化されたことが明らかである。さらに、宅地に付随する常畑の方が水田よりも地名の密度が高いが、これは、水田地名は水利の関係で共用されるのに対し、このような畑地名は、より個人的に命名されるため細分化されたと考えられる。

一方、林野においては、入会林野よりも私有林野の方が地名の密度が高くなっている。林野の経済的な利用価値が高いほど、入会林野の解体が進み、それが私有林野における地名の細分化に反映している。また入会林野の場合、それぞれの利用に際しては、小さな谷などの通称地名も使われるが、土地の管理の単位としては、あのような大きな区分で十分であったといえる。

(3) 地名の語彙の分布

次に、地名の語彙の分布について分析を進める。図7は、それぞれの村落で数多く見られる特徴的な地名の接尾辞を図示したものである。

まず、稲作が主体となっていた太郎路と杉谷では、田に関する地名が数多く見られる。太郎路では前田・柚田・窪田・峰田・高野田など、杉谷では稗田・圃田・宮内田・一反田・皇神田など、それぞれの土地の特徴を表現したものや儀礼的な意味を示唆するものが多い。また水田である土地でも、堀・平などの地名が見られるが、それは谷地田に多く、より新しい時期に開かれた水田がかつての地形地名を受け継いでいるものと推察される。

一方、畑作が主体となっていた平雄と大成では、畑地名が複数みられる。平雄では中畑・東畑・北畑・西畑・扇畑など、大成ではサガ畑・エガマ畑・扇畑がある。また、平雄では平・迫など、大成では野・窪・畝などの地名が耕作域にみられるが、両者にはそれほど共通性はない。

山林や原野の部分に目を向けると、山地名は、太郎路では村境に接する部落有林野のところに亀山・焼山・コゴ山が、平雄では北部の村境にそって柚野山・丸山・峰山などがみられる。しかし、山があまり険しくない杉谷では山地名はまったく見られず、大成でも数少ない。また、

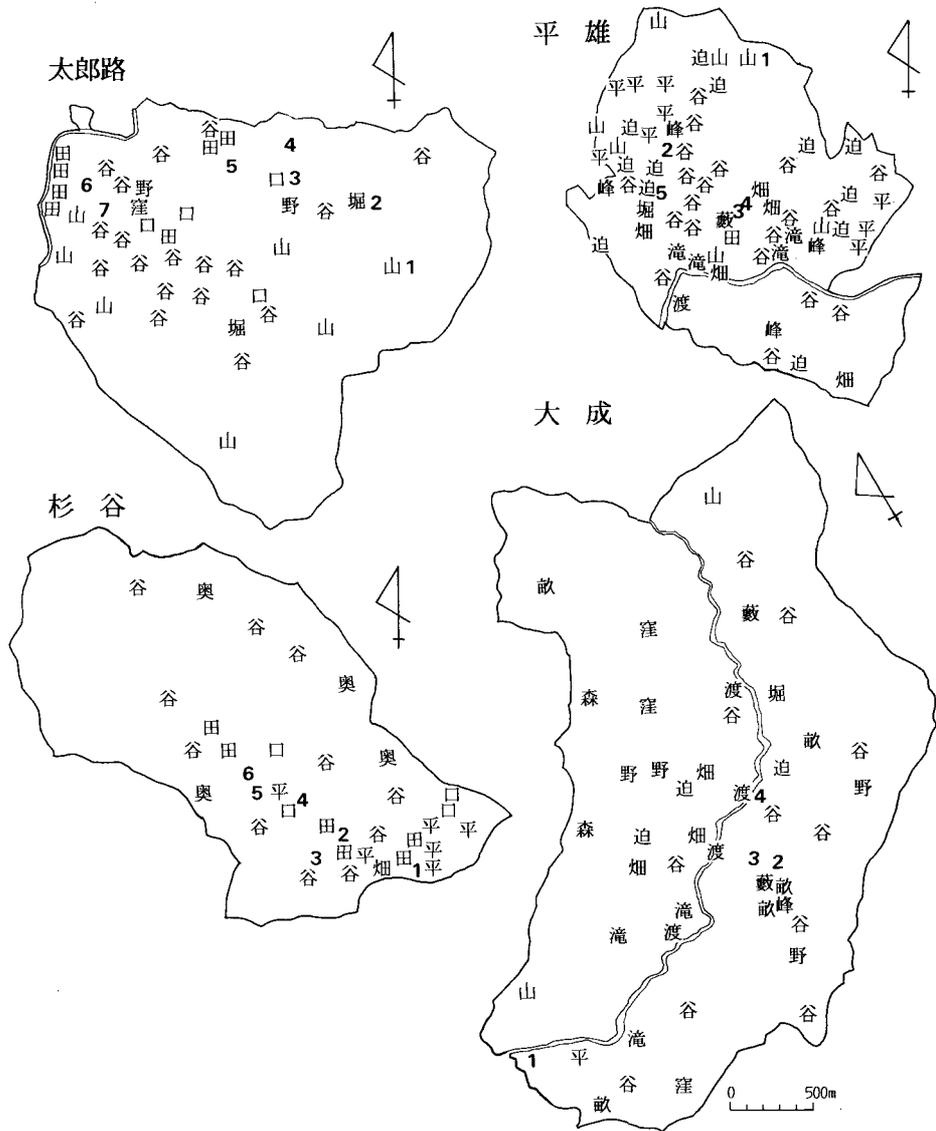


図7 事例村落における地名の分布

- 〔太郎路〕 1. 亀山 2. 立堀 3. 大口 4. 兵足 5. 水呑 6. 堂の前 7. 庵の前
 〔杉谷〕 1. 地藏 2. 馬野林 3. 薬師 4. 的場 5. 庵屋敷 6. 宮地
 〔平雄〕 1. 柚野山 2. 苗代 3. 道場前 4. 徳前寺 5. 東福寺
 〔大成〕 1. お鶴落とし 2. 宮の前 3. 観音石 4. 木地場

平雄と大成では起伏の大きな地形に対応し、急傾斜地に命名される滝地名が散見される。

さらに四つの村落にみられる共通点は谷地名の多さである。谷は視覚的に把握しやすく、その特徴も捉えやすいこと、そしてそこを流れる

水の重要性によって、より識別されやすいという性質を持つ。とくに稲作を主体とする太郎路と杉谷において、林野と耕地の境界部分に口という位置関係を示す地名がみられることは象徴的である。そこは山への入口であるとともに、

水が流れてくる谷の口でもある。

さらに、何らかの意味を持った特別な地名についても言及しておきたい。太郎路では、次章で言及するお亀池の伝説に関係する大口・立堀・兵足・水呑といった地名のほか、お堂や神社にちなむ堂の前・庵の前といった地名が集落に近接してみられる。杉谷では、地藏・薬師・宮地・庵屋敷といった信仰にちなむ地名が耕作域に点在していることがわかる。杉谷の馬野林と的場という地名は、合戦のときに馬の調教をしたといわれている場所である。平雄と大成では、寺社に関連する地名が集落域にみられる。大成の宮の前という地名は、江戸時代末に焼失したという神社の所在を示してくれる。また「お鶴さんが落ちた」というお鶴落とし、「木地屋の墓があった」という木地場などが、大成の集落から離れた位置にみられる。このようにわずかな事例しか検討していないが、寺社などの信仰に関する地名は、集落域や耕作域に集中して分布することが指摘できよう。

以上のように、稲作を主体とする太郎路と杉谷では田地名が頻出するが、畑作主体の平雄と大成では、耕作域でも畑地名より地形地名の方がより多くみられた。これは、水田を開拓することが、農業のなかで大きな意味を持ち、土地の改変をとまなうためであろう。さらに、杉谷と大成は、焼畑が残存したという特性を持つが、杉谷の林野に対する認識は、谷や奥という地名で区分されているだけで、それほど細やかではない。これは、杉谷の焼畑が稲作の副次的な位置にあったことが大きいと考えられる。

こうした小字地名はその時点の人々の認識する環境をそのまま反映するものではなく、それ以前の一定期間にわたる土地利用のもとで形成されたものが、行政的に確定され、それを使用することによって固定化されたものである。したがって、昔からそのように呼んでいるだけで、その意味はよくわからないとされる地名も多い。しかし、それゆえ、地名のなかに付与されている歴史性を読むことが必要となるといえよう。

V. 伝説・伝承からみた山に対する認識

最後に、伝説・伝承からみた山に対する認識について、民俗誌などを利用しつつ考察する。こうした資料は、かつては、柳田國男の主導のもと、各地から膨大なものが集められ、記録されてきた。また、第二次世界大戦後には、地方自治体などによる民俗調査が行われ、その報告書も数多く残されている。しかし、このようなかたちで集められた民俗資料の記録の多くは、伝承母体である村落に即したのではなく、語られた内容の村落社会での位置づけや個々の村落社会の地域性と歴史性を読み取ることが困難なものが多い¹⁷⁾。それゆえ、民俗誌の方法をめぐる議論が生じているといえる¹⁸⁾。従来の民俗調査報告の利用については、現地調査による再検討を含めた慎重な取扱いが必要となろう。ここでは、前章で取り上げた奈良県曾爾村太郎路と西吉野村平雄における、特定の山と結びついた伝説・伝承について検討する。

まず、宮本常一の『吉野西奥民俗採訪録』によって考察を進める。これは、柳田を代表として行われた山村生活調査を契機とした昭和11(1936)年から数年にわたる民俗調査の報告である。以下、宮本の記述を紹介する。

平雄の柚野山(849.8m)には宮座があった。この山には共有山があり、それを貸した年一石の地子米が宮座の費用のたしになった。宮座は隔年の3月20日に行われ、くじ引きで決められた頭屋のもとで支度をし、餅と餅をついたタテウスと白と緋色のちりめんで作った幟をもって山に登った。山の上では三社(天照皇大神・春日大神・八幡大神)の託宣を祀って座をした。ただし、山を売ってからは座行事も簡単になった¹⁹⁾。また、柚野山などは共有山であったが、明治初期に学校を建てるために売ってしまった。売却金のうち3600円を学校の基本金に、2400円は寺の永代教の積立金にした²⁰⁾。

これらのことより、柚野山が信仰の対象になっており、宮座を中心とするムラ人の結びつきが共有山によって強められていたこと、しかしそ

の山の売却によって宮座が弛緩しつつあったことが読み取れる。

それと同時に、西吉野村の中心集落である城戸^{じょうど}で採録された伝承のなかに、柚野山の禁忌という記述がある。それは、この山はもとは大切な山であったが、村の都合で売り払った。この山を買った者はたいへん大きな損をするか、寿命が短い。山の頂上に八畳一間ほどの木の生えない所がある、というものである²¹⁾。ここで興味深いのは、平雄以外の周辺地域にこの話が伝わっていることである。おそらく山の売却後にこの伝承が生まれてきたと推察され、そのなかに信仰の対象とする山を売却した無念さをうかがうことができる。

もう一つの例として、太郎路の亀山(851m)と、その麓に位置するお亀池にまつわる伝承・伝説をみていきたい²²⁾。

太郎路ではダケノボリが行われていた。これは、奈良盆地とその周辺地域で見られる雨乞いの行事で、曾爾村では各村落ごとに一番高い秀麗な山へタイマツに点火して登ったという。太郎路のダケヤマは亀山であり、稲作に必要な水への関心がうかがわれる。

また、お亀池には大蛇の伝説が残されている。それは、太郎路に住む男の家にお亀という美しい女が訪ねてきて二人は夫婦になり、子供も生まれた。ある夜、草履が毎朝濡れているのを不審に思いお亀に尋ねると、自分は亀山の池に牡の竜と住む牝竜であり、池とつながるこの家の井戸で通っていたと告げ、暇乞いをした。ところが子供が夜泣きするので、男がお亀の名を呼びながら池のあたりまで来ると乳を飲ましてくれたが、もう来てはならないと言われた。しかし子供が泣いて仕方がないので、再び池へ行くと、牝竜が大きな口を開けて襲いかかってきた。その場所を大口といい、さらに、竜が真っ直ぐの姿勢で追ってきた場所を立堀、休んだ場所を兵足、水を飲んだ場所を水呑という、というものである。

これらの場所は、図7に示したように、小字地名と結びつけて伝えられている。大蛇が人間

男性と婚姻を結ぶ伝説は各地に残されている。こうした話は洪水伝説から派生したとも言われ²³⁾、ここでも水との関連が示唆されるのではないか。

以上のように、平雄の柚野山、太郎路の亀山はともに信仰の対象となりながら、その意味に違いがあることがわかる。それは、畑作が主体で採取的な林業を営んでいた平雄と、稲作が主体で林野を農業用採草地としていた太郎路という、土地利用のあり方の相違に結びつけて考えることが可能ではないだろうか。

VI. おわりに

本稿では、民俗資料を検討することによって、四つの山間の村落の分析を試みた。事例の分析については不十分な点が多いが、その結果について簡単にまとめておきたい。

それぞれの村落ごとに地名の位置関係、地名の語彙の分布に相違がみられた。これは、四つの村落における地域的条件の違いによってもたらされるものである。こうした可変的な部分を除く本質的な部分は次のように考えられる。

まず、宅地や耕地のように土地利用の頻度が高くなっているところほど、地名の密度が高くなっていた。固定的な土地利用が続けば、個人的な命名がなされるため、より地名が細分化されていったと考えられる。一方、林野においては、入会林野よりも私有林野の方が地名の密度が高かった。さらに、林野の経済的価値が高いほど、入会林野が解体され、私有林野における地名の細分化につながっていた。

その結果として、地名の分布の密度から環境認識のあり方を読み取ることができる。例えば、平雄は最も地名の密度が高かったが、それは四つの村落のなかで最大の人口を維持しており、それだけ集約的で固定的な土地利用が近世後期より行われていたことを反映していたと考えられる。そこでは、土地が細分化されて命名されており、その環境はムラ人によって隅々まで細やかに識別されていたのである。

また、村落ごとの性格によって、水田・常畑・

焼畑・林野がそれぞれどのような位置づけにあるのかも読み取れよう。また、集落・水田・常畑・焼畑・林野という土地利用の違いが地名の配置に現れており、その語彙を検討することによって、さらにどのように認識されていたのかを推察できる。

このように民俗資料としての地名を分析することによって、土地利用と環境認識のあり方を探ることができる。また、小字地名の利用は、複数の地域を比較検討しやすいという利点を持つ。さらに、民俗資料として伝説・伝承を検討することによって、ムラ人のもつ認識を探ることが可能である。ただし、いうまでもなく、民俗資料を分析するだけでは、土地利用を復原し、環境認識のあり方をすべて描き出すことはできない。そのためには、さまざまな分析が行われなければならない。

(群馬大学教育学部)

〔注〕

- 1) 和歌森太郎(1972)：民俗資料(大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂)，712～713頁。
- 2) 民俗学研究所編(1951)：『民俗学辞典』，東京堂出版，227～229頁。
- 3) 柳田國男(1980)：『民間伝承論』，伝統と現代社，114～133頁(初出，1934年)。
- 4) 前掲2)，595～597頁。
- 5) 古島敏雄(1974)：民俗学と歴史学(野口武徳・宮田 登・福田アジオ編『現代日本民俗学Ⅰ 意義と課題』，三一書房)，93～107頁(初出，1949年)。
- 6) 古島の指摘とは方向性がずれるが、「伝承」概念の検討は試みられている。
小嶋博巳(1993)：ひとつの「伝承」論——イイツタエ・シキタリという文化の正当化について——，日本民俗学193，2～14頁。
川田順造(1993)：なぜわれわれは「伝承」を問題にするのか，日本民俗学193，15～21頁。
- 7) 有賀喜左衛門(1969)：民俗資料の意味——調査資料論——(『有賀喜左衛門著作集Ⅷ 民俗学・社会学方法論』，未来社)，36～73頁(初出，1953年)。

- 8) 和歌森太郎(1981)：民俗資料の歴史的意味(『和歌森太郎著作集10』，弘文堂)，258～290頁(初出，1963年)。

この点に関連して、櫻井徳太郎は、民俗像の歴史的復元をはかる場合、重出立証法の取ってきた方法、すなわち地域社会を無視し抽象化しながら民俗資料を整理し、類型的序列を時間的変化の過程に置き換えるという問題点を指摘し、それを克服するために、伝承母体である地域社会の生活実態に即して考察する必要性を論じている。ここでいう地域社会とは、集落間の民俗を比較するため、旧来の郷・庄や現在の行政村レベルのスケールを想定している。

櫻井徳太郎(1989)：歴史民俗学の構想——郷土における民俗像の史的復元——(『歴史民俗学の構想 櫻井徳太郎著作集8』，吉川弘文館)，19～76頁(初出，1972年)。

- 9) 西垣晴次(1975)：民俗資料と民俗調査(西垣晴次編『民俗資料調査整理の実務』，柏書房)，3～9頁。
- 10) しかし、ここでいう「地域性」は、民俗が地域社会に規定されているといった意味で使われており、地理学における概念とは異なっている。こうした民俗学における「地域性」概念の多様性とその問題については次のものなどで論じられている。
岩本通弥(1993)：地域性論としての文化の受容構造論——「民俗の地域差と地域性」に関する方法的考察——，国立歴史民俗博物館研究報告52，3～48頁。
山本質素(1993)：日本民俗学における「地域差」と「地域性」概念について，国立歴史民俗博物館研究報告52，219～265頁。
- 11) 竹内利美(1960)：「民俗」資料の性質とその収集方法(『日本民俗学大系13』，平凡社)，20～28頁。

なお、大月隆寛によれば、歴史学からの「民俗資料」批判などを受けて、民俗学の目的が常民の「歴史」から「民俗性」の究明へと変化していったこと、それ以降、歴史学との接触関係が非生産的で薄められたものになったという。

大月隆寛(1992)：常民・民俗・伝承(『民俗学という不幸』，青弓社)，113～175頁。とくに

125～127頁。

- 12) 千葉徳爾(1985)：郷土研究における二、三の問題，愛知大学総合郷土研究所紀要30，49～60頁。
- 13) 千葉徳爾(1966)：民俗資料の性質と分類(『民俗と地域形成』風間書房)，154～168頁。
- 14) この事例についての詳細は拙稿を参照のこと。
関戸明子(1994)：焼畑山村における林野の社会的空間構成と主体的土地分類——愛媛県面河村大成を事例に——，人文地理46-2，144～165頁。
- 15) 千葉徳爾(1979)：日本民俗学の研究方法における二、三の問題について——地域変換法を中心に——，歴史人類7，87～117頁。
- 16) 前掲14)のほか，次の拙稿を参照のこと。
関戸明子(1992)：奈良県曾爾村における林野所有と林野利用の変容過程，地理学評論65A-5，373～394頁。
同(1989)：山村社会の空間構成と地名からみた土地分類——奈良県西吉野村宗川流域を事例に——，人文地理41-2，122～143頁。
- 17) こうした指摘は，すでに昭和14年，山口麻太郎によりなされているが，当時は全国的な資料の比較を行うことに性急であったため，ほとんどかえりみられることがなかった。
関戸明子(1994)：山村研究の成立過程における動向——山村生活調査(1934-36)と地理学研究——(『西垣晴次先生退官記念宗教史・地方史論纂』，刀水書房)，795～810頁。
- 18) 例えば「民俗誌の記述についての基礎的研究」の報告書に収められた諸論考を参照のこと。この

報告書で示された調査という行為・記述という行為についての批判的検討は，多くの示唆に富む。

国立歴史民俗博物館編(1991)：『国立歴史民俗博物館研究報告34』，221+64頁。

同編(1993)：『国立歴史民俗博物館研究報告51』，416頁。

- 19) 宮本常一(1973)：『吉野西奥民俗採訪録』(『日本常民生活史料叢書19』，日本常民文化研究所)，59～60頁。
- 20) 前掲19)，37～38頁，57頁。
- 21) 前掲19)，84頁。
- 22) 曾爾村史編集委員会編(1972)：『曾爾村史』曾爾村役場，792～793頁。
曾爾尋常高等小学校編(1931)：『曾爾村郷土誌』，首藤義昭(1968) 謄写，139頁。
新藤正雄(1932)：お亀が池の伝説，旅と伝説5-5，43～44頁。
なお，この伝説には多くの異同があり，留意せねばならない問題である。この点については今後の課題としたい。
- 23) 関 敬吾(1978)：蛇女房(『日本昔話大成2 本格昔話1』，角川書店)，158～175頁。

〔付記〕

本稿は歴史地理学会大会シンポジウム「環境と歴史地理」(1994年6月26日，於：山形県生涯学習センター)において報告した内容に加筆修正を行ったものである。当日，貴重なご教示をいただいた諸先生方にお礼申し上げます。

LAND USE OF RURAL VILLAGES AND VILLAGERS' COGNITION OF ENVIRONMENT :
REFERRING TO SOME DISCUSSIONS CONCERNING RESEARCH
MATERIALS IN JAPANESE FOLKLORE

Akiko SEKIDO

The aim of this paper is to consider the method for understanding on historical environment by the analysis of folklore materials. For this purpose, the author traced some discussions concerning research materials in Japanese folklore. It is considered that these include not only oral traditions but also written documents, if these concern the people's way of thinking.

Therefore, the author restored land use of Onaru *village* in 1945 and after about 1945, Omogomura, Ehime prefecture, according to written documents and oral traditions (Fig.1 and Fig.2), in order to explain the utility and limitations of both materials.

Furthermore, this paper made use of *Koaza* (small place name) as materials for folklore, and examined the relations between land use and spatial patterns of *Koaza* and the distribution of suffixes in the 1880's. As a comparative study, the author chose four rural *villages*, Taroji in Soni-mura (Fig.3), Nara prefecture, Sugitani in Imajo-cho (Fig.4), Fukui prefecture, Hirao in Nishiyoshino-mura (Fig.5), Nara prefecture, and Onaru (Fig.6). Taroji and Sugitani were mainly composed of paddy field farming. Hirao and Onaru were mainly composed of dry field farming. In Onaru, most of the fields were shifting cultivation. The results are summarized as follows :

The density of place names became higher with the frequency in use of land such as housing lots and cultivated area. In the forest-lands, the density of place names became higher in private lands than in common lands. It was possible to consider that, if the villagers continued to use the same fields, the lands were subdivided by giving the place names showing their occupancy.

In Taroji and Sugitani, many place names signifying paddy fields were found. In each *village*, there were many suffixes signifying landform environments such as valley (*-tani*), flat place (*-taira*), mountain (*-yama*). These suggested that the reclamation of paddy fields was significant for the villagers and they identified the local environment in detail.

Finally, the author examined villagers' cognition of mountains through the analysis of traditions. In Taroji and Hirao, there was a difference in their faiths for mountains. It was supposed that the difference in land use influenced their faiths.